

先週はマリアの賛歌「マグニフィカート」と呼ばれる箇所から、御言葉を聴きました。今日は「ベネディクトゥス」と呼ばれる「ザカリアの賛歌」からです。ザカリアは、ここで神さまをほめたたえています。神のどんなことに対して賛美しているのでしょうか。

それは「**神の憐れみの心**」によって、御子が私たちのために降誕された、ということです。「**憐れみ**」とある言葉、実はこれ、著者のルカが、神や主イエスを主語にした場合にしか用いない言葉で、それをここで用いているのです(例「五千人の給食」マルコ 6:34、「ナインのやもめ」ルカ 7:13)。意味は、「腸がちぎれるような痛みを表す言葉だと言います。日本語にも「断腸の思い」などの表現がありますが、強い感情を表すのに内臓を比喩的に使った言葉であるのです。

御子イエス・キリストの降誕は、「**神の憐れみの心**」によるものだったのです。それは、父なる神が私たち罪人に向けておられる心です。ザカリアは生まれた子ヨハネを指してこう言っています。76 節「**幼子よ、あなたはいと高き方の(すなわち、神の)預言者と呼ばれる。…主の民に罪の赦しによる救いを 知らせるからである**」。また、一人息子を失い悲しみの中にいるやもめに抱かれた主の御心——自らの罪に嘆き悲しむ者に抱かれる神の心——がそれです。こうした“心”が、今日の箇所での神の心に重ね合わされて描かれているのです。その憐れみの心は、やがて私たちを救うために十字架に命を捨ててくださる、御子・独り子イエス・キリストを与えるほどの憐れみとなっていくのです。 78～79 節

**これは我らの神の憐れみの心による。この憐れみによって
高い所から曙の光が我らを訪れ 暗闇と死の陰に座している
者たちを照らし 我らの足を平和の道に導く。**